

彩色・彫刻関係

沖縄総合事務局

1. 石材関係(細粒砂岩)

○前回復元において、礎石や石彫刻類に使用された与那国産細粒砂岩、基壇や石積等に使用された琉球石灰岩について、調達に向けて詳細な現地調査を実施しているところ。



集積されている与那国産細粒砂岩



大型の与那国産細粒砂岩

■今後の予定

○与那国産細粒砂岩については、すべて原石の状態であることから、歩留まりを考慮した必要数量の精査を実施しつつ、与那国町等と連携し、具体的な石材の搬出方法、搬出時期等について検討を進める。

○今後の石材(与那国産細粒砂岩や琉球石灰岩)の調達について、量的確保の視点に加えて、品質確保の面からも検討を進める。

2. 塗装関係(久志弁柄)

○前回復元以降の調査研究を踏まえ、鉄バクテリアが作り出す黄褐色沈殿物を由来とするBIOX弁柄について、沖縄本島北部地域にて現地調査を実施したところ。

○現地調査の結果、BIOX弁柄が山側から滲み出し、側溝や小川に流れ出していることを確認し、サンプリングを実施。



現地で確認されたBIOX弁柄の黄褐色沈殿物

■今後の予定

量産化製造試験、暴露試験(耐候促進試験)を実施し、今回の正殿復元工事での塗装作業の着手時期を見据えて、安定的な量産化に向けた検討を進めていく。

2. 塗装関係(久米赤土)

○前回復元以降の調査研究を踏まえ、正殿2階連子の塗装に必要となる久米赤土の賦存量を把握するための現地調査を実施したところ。

○現地調査の結果、A地区(前回復元、平成18年漆塗直し採取地)と、B地区(次候補)ともに久米赤土の賦存量に関して問題はないことを確認し、サンプリングを実施。



現地で確認された久米赤土(左:A地区、右:B地区)

■今後の予定

塗装試験、暴露試験(耐候性促進試験)を実施し、今回の正殿復元工事での塗装作業の着手時期を見据えて製造計画を検討していく。

3. 瓦当文様について

○前回復元においては、正殿跡での発掘調査や昭和修理前後の古写真、県内古建築の分析、「拝殿図」の内容をもとに、瓦当文様を決定。

【軒丸瓦】

県内古建築での分析では ㊦タイプが多く確認されたものの、灰色瓦と赤色瓦の時代に分布しており、正殿跡の発掘現場で多く出土し、また「拝殿図」に記載のある ㊦タイプを採用した。

【軒平瓦】

灰色瓦から赤色瓦まで共通に見られる文様で、各調査資料や昭和修理前後の古写真で多く確認でき、また「拝殿図」に記載のある㊦タイプを採用した。



軒丸瓦 ㊦タイプ



軒平瓦 ㊦タイプ

『首里城跡—正殿跡発掘調査報告書—』(2016年3月)

| 色調 | 軒平瓦 | 軒丸瓦 | | |
|----|-----|-----|--|--|
| 灰色 | | | | |
| | | | | |
| 赤色 | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |

首里城正殿跡出土瓦編年表

『首里城正殿実施設計報告書』(1989年3月)5

3. 瓦当文様について

今回復元における瓦当文様について

(1) 瓦当文様の変遷について

- 1715年の正殿再建以降、酸化焼成による赤瓦が徐々に普及するようになり、1768年の正殿大修理(「寸法記」)以降では、赤瓦が主流になっていたと想定される。
- 赤瓦の時期での軒丸瓦の瓦当文様としては、㊦タイプが主流となっている。

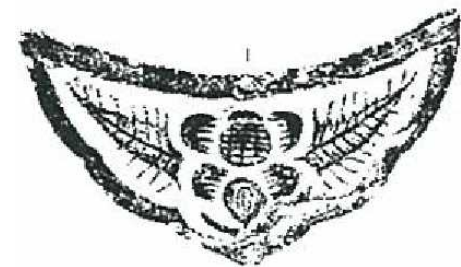
(2) 瓦当文様と正殿の彫刻物との関連について

- 前回復元時の軒丸瓦の瓦当文様である㊧タイプは、牡丹を側面から描いたタイプ(側面タイプ)の文様である一方、㊦タイプは、牡丹を正面から描いたタイプ(正面タイプ)のデザインであると考えられる。
- 1768年の唐玻璃豊大改造で変更されたと考えられる彫刻物の牡丹の図柄は正面タイプで、彫刻物と瓦当文様のデザインが整合していることが考えられる。

⇒以上を踏まえて、正殿の軒丸瓦の瓦当文様は、見直しに向けて検討を進めていく。



軒丸瓦 ㊦タイプ



軒平瓦 ㊧タイプ